

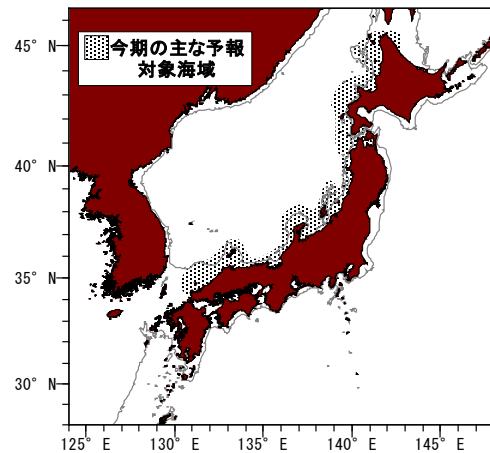


平成28年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成28年5月~7月)のポイント

- ・ 来遊量は、前年並で近年平均を下回る。
- ・ 漁期の開始時期は、前年および近年平均より早い。



* 近年は最近5年間(平成23年~平成27年)

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所

担当：業務推進部 加藤、江連

資源管理部 上原、久保田

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0850

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成28年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年5月～7月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海

対象漁業：主にいか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：前年並で近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期の開始時期は前年および近年平均よりも早い。

* 近年は最近5年間(2011（平成23）年～2015（平成27）年）

I 漁況予報

日本海におけるスルメイカの資源調査結果（2015年10月～11月の日本海スルメイカの幼生分布調査、および2016年4月のスルメイカ新規加入量調査）と海洋環境予測を主要な情報として、今期（2016年5月～7月）の日本海におけるスルメイカの漁況を下記のとおり予測した。

【予測】

今期（2016年5月～7月）の日本海沿岸域へのスルメイカ来遊量は不漁であった前年並で、近年平均を下回ると予測される。北陸を中心とした漁期の開始は前年および近年平均よりも早いと予測される。

【情報】

- (1) 2016年4月に実施したスルメイカ新規加入量の調査結果では、今期に漁獲対象になると予測される外套背長5cm以上のスルメイカの採集尾数は前年および近年平均を下回った。
- (2) 2015年10月～11月に実施したスルメイカの幼生分布調査では、幼生の分布密度が前年および近年平均を下回った。
- (3) 前年の5月～7月の小型いか釣り等によるスルメイカ（生鮮）の漁獲量は、1994年以降で最も少なかった。
- (4) 漁期の開始時期に影響を与える4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温と水深50mの水温は共に平年よりも「やや高い」と予測されている。

II 説明

1. 調査結果

1) 4月におけるスルメイカの分布状況

<目的>

いか釣り漁業では外套背長15cm以上のスルメイカが主な漁獲対象となる。したがって、いか釣り漁業で漁獲される前のスルメイカ（主に外套背長2cm～10cm）の分布状況を事前に把握することで、その後の漁況を予測することが可能になる。そこで、日本海では主漁期前の4月に漁獲加入前のスルメイカの分布状況を把握するために新規加入量調査^{*1)}を実施している。なお、本調査で採集されたスルメイカのうち、外套背長5cm以上のサイズが今期（5月～7月）の漁獲対象になると想定される。

*1) 新規加入量調査：口径10m～12mの表層トロール網を用いた採集調査。各調査定点で3ノットの速度で30分間曳網して実施。

<結果>

2016年の調査結果（図1）では、外套背長5cm以上のスルメイカはほとんど採集されなかった。一方、兵庫県沖では外套背長5cm未満のスルメイカが多数採集された。

1調査点あたりの平均採集尾数は33.3尾であり、前年（107.6尾）および近年平均（53.9尾）を下回った。また、今期（5月～7月）の漁獲対象になる外套背長5cm以上の平均採集尾数も5.8尾であり、前年（51.2尾）および近年平均（20.5尾）を下回った（図2）。

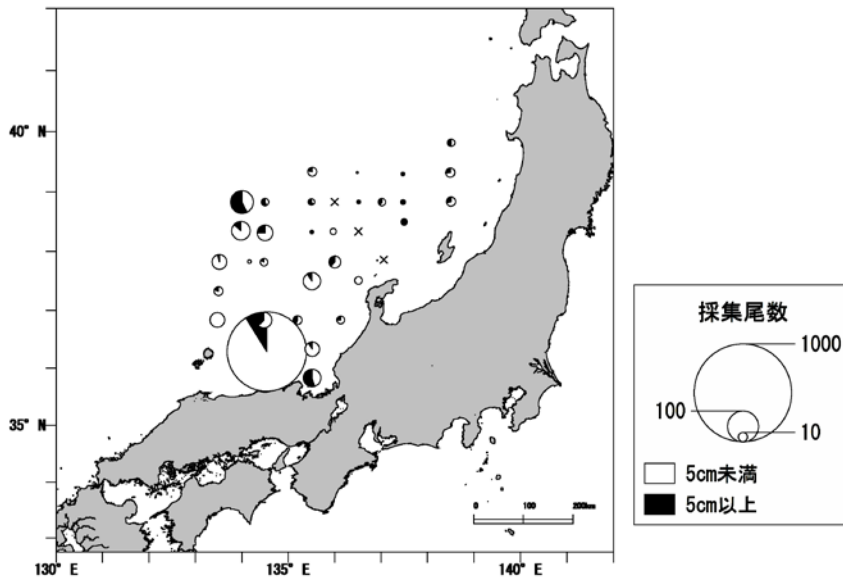


図1 2016年4月のスルメイカの新規加入量調査結果
 (○の面積は採集尾数、×は採集されなかった調査点)

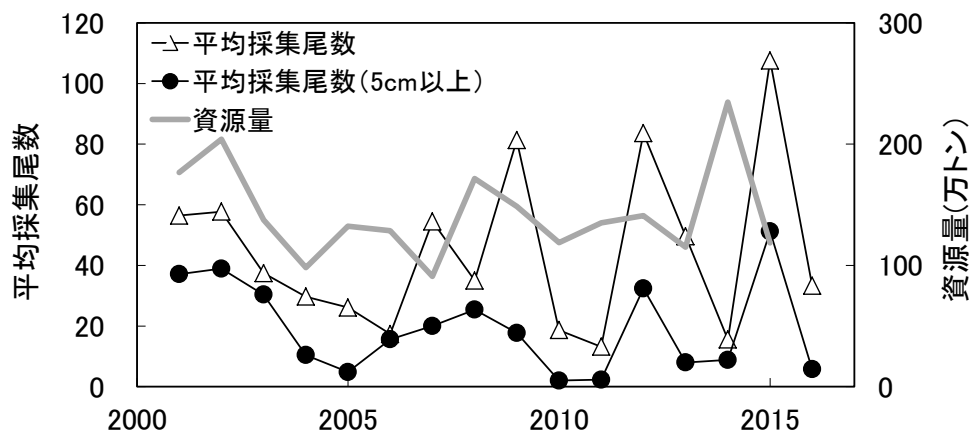


図2 新規加入量調査による平均採集尾数と推定資源量の経年変化
 推定資源量は、前年度におけるスルメイカ秋季発生系群の資源評価調査結果の値

2) 前年秋のスルメイカ幼生の分布量

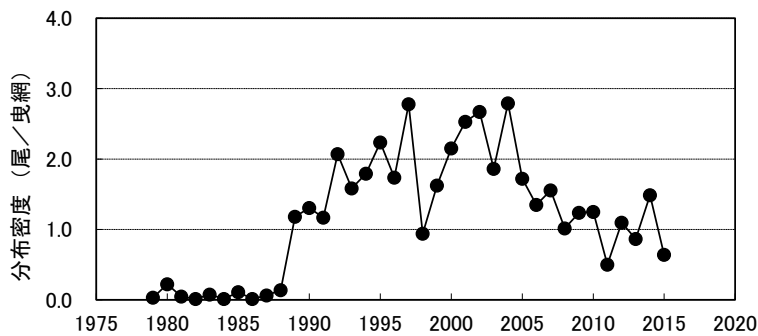
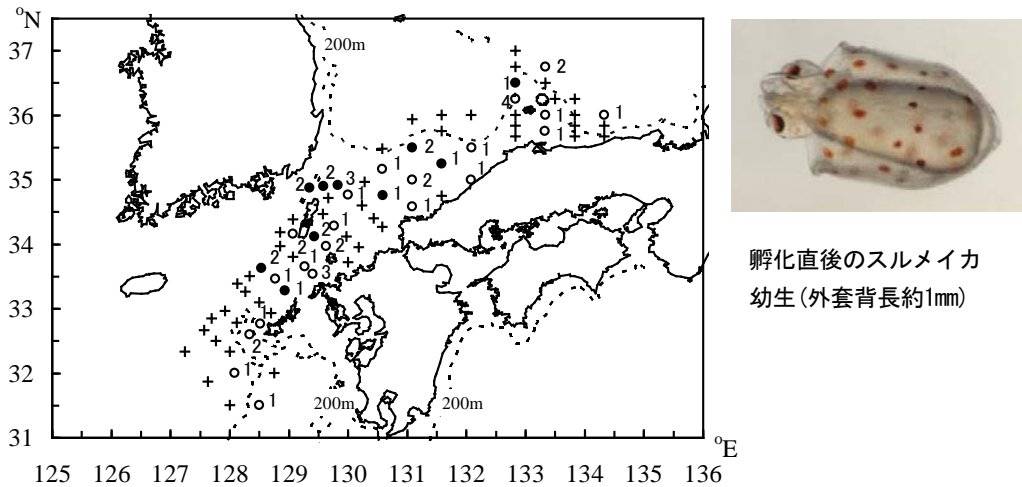
<目的>

5月～10月の日本海では、主に前年の秋～冬に生まれたスルメイカ秋季発生系群が漁獲される。したがって、前年秋～冬のスルメイカ幼生の分布量は、スルメイカ秋季発生系群の親魚量（とり残し量）の指標値になる。そこで、日本海では、10月～11月にスルメイカの幼生分布調査^{*2)}を実施し、前年のとり残し量（確保された親魚量）の把握を行っている。

*2) 幼生の分布調査：口径45cmのプランクトンネット（網目0.33mm）を用いた採集調査。各調査点で水深150mまでの鉛直曳によって主に外套背長1～3mmのスルメイカ幼生を採集する。

<結果>

2015年も隠岐諸島から対馬海峡付近の海域で幼生が採集された（図3）。しかし、1調査点あたりの平均採集尾数は0.64尾であり、2014年の調査結果（1.49尾）および近年（2010年～2014年）平均（1.04尾）を下回った（図4）。そのため、2015年の漁期終了後に確保された秋季発生系群の親魚量は前年および近年平均よりも少なかったと判断される。



2. 日本海における海洋環境

スルメイカの分布回遊は水温と深く関連しており、沿岸域の漁期の開始・終了時期は水温の高い方が早くなる傾向がある。気象庁の資料^{*3)}によると、2016年4月中旬の日本海における表面水温は、全体として平年並～やや高めであり、北緯40度付近で平年比がもっとも高かった。また、平成28年度第1回日本海海況予報^{*4)}では、対馬暖流域における4月～6月の表面水温および水深50mの水温は平年よりもやや高めで経過すると予測されている。したがって、本州北部以北を中心とする今期のスルメイカ漁期の開始時期は前年および近年平均よりも早いと予測される。

*3) <http://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/shindan/index.html>

*4) <http://abchan.fra.go.jp/gk28/20160406.pdf>

Ⅲ 日本海におけるスルメイカ漁況の経過

日本海では、1月～3月上旬は前年の冬に生まれたスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲され、3月中旬～4月は前年の春～夏に生まれたスルメイカ、5月以降は前年の秋に生まれたスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲の中心となる。

前年の予報対象期間（2015年5月～7月）では、5月の漁獲量は近年平均並であったが、6月以降は西部日本海を除き、近年平均を下回った（図5）。前年の5月～7月の合計漁獲量（主に小型イカ釣り漁業によるスルメイカ（生鮮））は、月別漁獲量データを整備している1994年以降で最も少なかった。前年の8月以降、11月に道南・津軽海域、12月に西部日本海域でそれぞれ近年平均を上回る水揚げがあったが、各海域とも近年平均並か下回る水揚げであった。

2016年1月～2月の漁獲量は前年を下回っていたが、3月に本州北部日本海および西部日本海で前年および近年平均並となった。

2016年の漁況は3月に好転したものの、新規加入量調査における外套長5cm以上の採集個体数が前年および近年平均を下回っており、今期の加入は少ないと予測される。ただし、5月～7月の合計漁獲量が1994年以降で最も少なかった前年をさらに下回るとは考えにくいことから、今期の日本海沿岸域へのスルメイカ来遊量は不漁であった前年並で、近年平均を下回ると予測される。

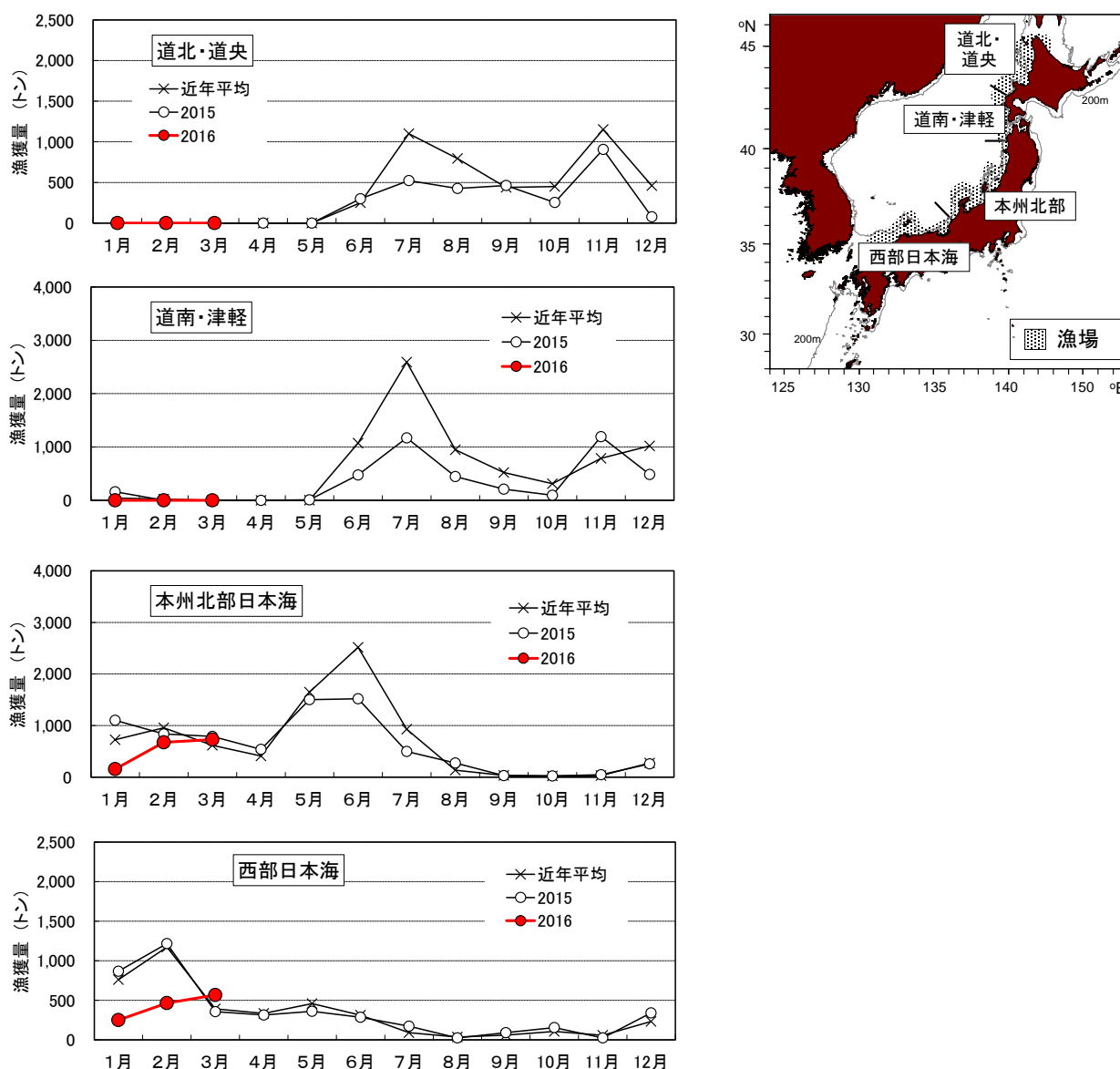


図5 日本海各地における漁獲量の経過（近年平均、2015年および2016年、ただし、2016年の一部は未集計および速報値）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所